

東国お遍路の旅 2013～2017



2017年3月

旅のチカラ研究所 植木圭二

第一章 霊場巡りとの出会い

■空海と旅する

いわゆるお遍路さんとは四国八十八カ所霊場巡りをする巡礼者である。この88の寺は空海つまり弘法大師に由来した霊場で、起源は様々なようである。空海が讃岐出身なことから四国で修行をしたことは事実らしいので、この四国の寺を修行する旅は1200年くらい続いていることになる。そしてお遍路さんとは、空海と一緒に旅するという意味で同行二人（どうぎょうににん）という言葉もある。

忘れてはならないのが、空海は真言宗の開祖なので巡礼する寺は全て真言宗の寺になる。

実は私は、空海のこと、真言宗のこともお遍路の旅をするまで学校の教科書でしか知らなかった。この旅で空海をもう少し身近な存在に感じられるようになるかもしれない。

空海の俗名は佐伯 眞魚（さえきの まお）、774年生まれ。835年没なので61才まで生きた。ちょうど今の私の年齢と同じで何やら感慨深い。

その眞魚が室戸岬の御厨人窟（みくろど）という洞窟で修行をしている時に、見えたものはただただ空と海だけであったという。この経験から空海と名のるようになり、このとき悟りを開いたといわれている。

ちなみに弘法大師という名は約100年後に後醍醐天皇からの諡（おくりな）である。

804年に30才で遣唐使として唐に渡り、2年で帰国する。本来の留学期間は20年で、約束違反の2年で帰国した理由は分からない。

人が20年かかることを2年でできてしまうほどの天才だったのか、唐に得るべきものがなかったのか、あるいは20年後の50才で帰国しても当時の人間の寿命から日本で布教活動はできないというライフプランを考えての行動だったのかもしれない。

空海はどんな思いを持って 2 年で帰国したのか。それを知るためには、空と海だけしか見ない生活をするか。

■ 関東八十八カ所霊場巡りとの出会い

四国が空海のゆかりの地で、真言宗の信者は空海と思いを共有するために四国お遍路の旅をする人も多い。あるいは信者でなくても四国お遍路の旅は人気が高い。しかし四国まで行けない人たちも多いので、日本各地に〇〇八十八カ所霊場巡りなるものがたくさんできている。

例えば北海道、関東、九州、伊豆、摂津などあるが、小豆島、知多、福岡県篠栗の 3 霊場は日本三大新四国霊場と呼ばれ、200～300 年の歴史がある。

関東八十八カ所霊場はまだ 20 年ほどで比較的新しい。関東 7 都県にまたがる広い地域の霊場巡りになる。

第一番霊場は群馬県の高崎で、以降は群馬、栃木、茨城と時計回りに関東地方を回り、最後の第八十八番霊場は埼玉県の熊谷で終わる。正確に言えば 88 霊場以外に特別霊場というのが 7 霊場あるので、合わせて 95 霊場になる。

何故、私たち夫婦がこの関東八十八カ所霊場巡りを始めたのか。

それは妻の父、私の母、妻の叔父が 2013 年に相次いで亡くなった。そして 3 人とも 88 才という年齢であったことに起因する。

私の実家の宗派は真言宗ということで、母の四十九日法要の時に寺の本堂の片隅に貼ってあった関東八十八カ所霊場巡りのポスターを偶然見てこの巡礼の旅を知った。妻と相談した結果、父と母の供養を兼ねてその 88 カ所を回ってみようとなった。

そしてもう一つ、私も妻も出身が群馬県で現在の居住は神奈川県なので、実は茨城や千葉にはあまり行ったことがない。良い機会なので疎遠のこの地方にも行くこともできて、東関東一周旅行も面白そうだというのも大きな理由でもある。



■お遍路の旅とは

残念ながら四国のお遍路旅は私には経験がない。従ってお遍路さんの衣装や泊まる宿の実態を知らない。それなりのしきたりなどがあるようである。いや、しきたりではなく歴史と言った方が正しいかもしれない。

それに比べると私たちの東国お遍路旅は、何も制約がない。衣装も普段着で杖も持っていないで、実にリラックスした格好だ。ただ関東八十八カ所霊場巡りのホームページには、規制はしないが推奨する服装は一応記載がある。

一回でぐるりと巡るほうが集中できるので良いと思うが、現役サラリーマンには難しい。私たちは休日を利用し小刻みに回る。その結果、3年半もかかった。

最初のうちは第一番霊場から順番に回っていたが、途中から順番は気にしなくなる。その理由は、この関東八十八カ所霊場巡りは20年前にできたもので、その順番には特別な意味がある訳ではない。多分、事務局が回り易く考えただけのことだと悟ったからである。

空海を思って旅するという意味の本質や目的を考えれば、不要なもの、どちらでもよいもの、重要なものが見えてくる。空海の時代に関東地方の寺は88もない。

関東で最古の寺は千葉県の鋸山日本寺が725年開山という。日本最古の寺としては向原寺（豊浦寺）が585年、飛鳥寺（法興寺）が587年であるが、一般的には飛鳥寺と言われている。

寺に行ったら参拝してから社務所に御朱印張を差し出し、御朱印をもらう。御朱印とは寺や神社を参拝した証としてA5サイズ程の御朱印張に寺社の名称、日付などを墨で書いてもらい朱印を押してもらうもので、御礼に300円を納める。

最近若い女性の間でこの御朱印がブームで、彼女たちを御朱印ガールと呼んでいるというから面白い。御朱印がブームになるなんて、本当に時代は読めない。

いずれにしてもおじさん族にとっては、御朱印ガールや歴女など寺社仏閣に行って若い女の子がたくさんいるのは実によろしい。

関東八十八カ所霊場巡りの場合はA4サイズの御朱印張が特別に販売されている。1番から88番、特別霊場が各1枚で裏面は印刷されていて表面は寺で書いてもらう。一枚ずつ切り離せるので寺では既に表面を書いたものを用意しておいて、差し替えで対応するところが多い。

本尊は門外不出で直接見ることも許されないので本尊を描いた小さな紙も一緒に渡してくれる。



第二章 寺巡り

■ 個性的な寺

2013年9月22日は秋の彼岸で、高崎観音で有名な高崎市の慈眼院を皮切りに私たちの東国お遍路が始まる。この寺では別室に通されて「延命十句観音経」を写経させてもらう。意味は観世音菩薩に帰依しますというものらしい。ほんの5分であったが私にとっては生まれて初めての写経になる。

前橋市の蓮花院は何でもそろっている。駐車場に大きな七福神の石像があり、本堂、鐘楼という普通の寺にある建物以外に、薬師堂、水子堂、魔除け大天狗堂、良縁堂、ペット火葬場、ペット霊園、納札堂、びんコロ地蔵等なんでもありの寺だ。

だから厄除け・各種祈願・ペット火葬・水子供養・車の交通安全祈願までしてくれる。ここに行けば何でもそろろう。そもそも川崎大師の前橋分身だというので本業は厄除けらしい。

桐生市の観音院も何でもそろっている。仁王門、鐘楼、本殿という当たり前のものに加えて弁財天、地蔵尊、六地蔵、大師像、仏舎利、水かけ不動、百度石、大黒天、金精大明神、水子地蔵、智慧一休などいっぱいある。あまり広くない境内は私の好きなサイズでもある。

栃木市の如意輪寺は、広い境内にはたくさんのお墓がある。それも古いものから新しいものまで、大きいものから小さいものまで、そして一般的なものを以外に個性的なお墓も多い。

縦長の墓石に「〇〇家の墓」と刻むのが一般的と私は思っているが、最近のお墓はトレンドが異なってきている。横長の低い墓石用い、刻まれている文言は「ありがとう」とか「安らかに」とかである。お墓というよりモニュメント、記念碑である。

お墓の購入を検討している人にはこの寺を訪れることを勧めたい。お墓の総合展示場である。

お墓というと君津市の圓明院に俳優の安岡力也さんの墓がある。ハードボイルドの俳優で有名だが、日本とイタリアのハーフで、父方はイタリアのマフィアだったというから演技も迫力がある。その彼にピッタリの風格とすごみを感じる墓で、黒と茶のまだら模様の大理石でできている。



宇都宮市の明星院というとても面白い寺に出会う。鐘つきの鐘楼がない。当然のように鐘もない。ではどうしているかという屋外にスピーカがあり、音響設備で鐘の音を出している。

寺の人がいたので本堂に通してもらったが、本堂の隅に家庭用のステレオ装置が置いてある。この中のタイマーを使用して時間ごとに鐘を鳴らしているという。

本堂や社務所には警備会社 ALSOK のシールが貼ってある。警備を ALSOK に頼んでいる、こんな寺も初めてである。寺の人に聞くと住職が代替わりをして合理的になったのと、住宅地にあるのが理由のようである。寺も時代に合わせて進化している。

栃木県芳賀町の閑静なところに観音寺がある。観音寺というのはこの八十八カ所霊場では同名の寺が多いが、この観音寺は庭に大きな木がありフクロウが生息している。このフクロウを見に近郊の人が集まってくるという。住職の人柄かもしれないが、来るもの拒まずの姿勢が強く感じられる。人間もフクロウも集い易いのだろう。

ここで般若心経の一字一写の体験をする。一字一写のみの写経は何も苦にならない。

本堂にはフクロウの写真の他に如来や菩薩の絵が掲げてある。釈迦如来、阿弥陀如来、大日如来、虚空蔵菩薩、金剛菩薩、般若菩薩などである。真言宗は大日如来を本尊としているはずだが、般若心経の写経など、混合でボーダレスになっている。

ちなみに如来とは悟りを開いた人であるが、菩薩とはその手前の悟り得なかった人でいわば道半ばで修行中である。もはや多くの日本人はこれらを全く区別していない。

水戸市の寶蔵寺（ほうぞうじ）は東日本大震災の爪痕が残る。水戸は福島県にも程近いが、震災から既に4年経っている。本堂や門などの施設は概ね補修が終わったが、倒壊して手付かずの墓石が多くある。

住職の話では、4年かけてようやくここまでできてきたが、補修費用の捻出が大変だったという。そもそも寺には潤沢に資金がある訳ではなく檀家の寄付で補修するのだが、当然のように檀家は自分の家を直すのを先にする。寺に寄付や資材が集まるのはその後ということである。

お墓に関しては持ち主が補修するのが原則で、倒壊して手付かずの墓は持ち主が不明な墓という。寺からは何度もいろいろなところに連絡しているが、持ち主が見つからない。

このままにしておくわけにもいかないので、最終的には寺が負担して直さないといけないと住職は言っていた。



千葉県香取郡の神崎寺は見た感じでは共同浴場のような入口になっている。その入口にちょっと留守にしているから用事があれば電話くださいという貼り紙がしてあって、待合室のようなところで待っていると壁にいろいろな言葉が書かれている。その中でちょっとした文章が目にとまる。

その内容を要約すると「不動様をお願いをするのではない。あなたが目標に向かって努力することを不動様の前で誓うものである。」ということが書いてある。

私は頭をガーンとたたかれた思いがした。まさしくその通りで仏教の神髄に触れたような気がした。

私も、神や仏にすがる思いでいろいろ頼みごとをする。例えば宝くじが当たるようにと祈るが、自分は何も努力をしない。こんなのは聞いてくれるはずがない。だから当たったことが無いのは当然かもしれない。

房総半島の山武市の勝覚自寺は、寺は修行をする山がつきものと思っていたが山など全く無い。代わりに目の前には九十久里浜が広がる。そのためか境内には波乗り不動明王の石像が立っている。高さ 50cm くらいの立像の不動明王が剣を持ってサーフボードに乗ってサーフィンをしている。そばに立札があり波乗り不動明王と書かれている。

そう、ここはサーフィンのメッカである。メッカ？、それはイスラム教の聖地のことだが、知らないうちにそんな言葉まで馴染んでいることに気が付く。日本教は、よろずの神々とは良く言ったものだ。

埼玉県川島の圓通寺は非常にきちんとしている。境内は石畳と玉砂利できれいに敷き詰められ共同墓地も整然と並んでいる。本堂の前には線香に火をつけるガスコンロまで用意されている。

寺の若い修行僧が対応してくれ、お茶缶を二つもらう。そしてなんと社務所にはタイムカードがある。いくらきちんとしているとはいえタイムカードとは、ここの住職の性格かもしれない。

■寺は修行の場

館林市の常楽寺は住職が住んでいない。御用の方は以下の番号に電話してくださいとあるので電話しようとする、既に先客がいて電話したという。待つこと 10 分で若い僧侶が車でやってくる。本堂を開けてくれて、中に通されると座ってくださいという。

般若心経を唱えるので、一緒にどうぞということで若い僧侶の後ろに座って私と妻と先客のおじさんも唱え始める。住職は若く、声も大きく力強い。その迫力に圧倒され、邪悪な鬼たちが恐れをなして吹き飛んでいくよう感じになる。

私も心の底から声を出したら、私の中の鬼退治にもなったような気持になる。こんな感覚も修行の一つかもしれない

この寺は本来由緒正しい寺らしく、それを感じさせるいろいろなものが本堂にある。残念ながら人が住んでいないということで至る所で老朽化が進んで、一部は朽ち果てている。

境内の真ん中に向かって石畳がある。ここで毎年火渡りの行を行っているという。この修行は熱した炭を敷き詰め、その上を裸足で歩くという。火の上を無事に歩けば健康と長寿を身に付け

られるという、いかにも東洋的で精神的な修行である。科学的には全く効果はないのだが、私には何だかわかるような気がする。良薬口に苦しかもしれない。

栃木市の特別霊場、出流山万願寺は本格的な寺で仁王像が並ぶ山門をくぐると薬師堂や鐘楼があり本堂に出る。

本格的というのはこの奥にそびえる出流山の中腹に奥の院があり、その途中には滝行をする滝もある。滝の脇には着替えるための小さな小屋もある。

奥の院の拝殿は鍾乳洞になっており、鍾乳石で出来た自然の観音様の後姿がご本尊になっているから面白い。

この寺は滝があるので溪流もあり、夏は避暑にもよさそうである。夏に限らず緑の山に堂々と建っている本堂や奥の院の姿は気持ちを落ちつかせてくれる。

どこかの寺の住職から聞いた話では、寺というのは修行の場だという。背後に山があって、その山で修行をするというのが本来の姿だという。だから寺は一般的には比叡山延暦寺のように〇〇山△△寺という表現をする。鞍馬山の鞍馬寺で牛若丸が修行をしたことが伝えられているが、そのイメージそのものである。

そう、寺は修行するところ、そして仏教の原点とは修行である。釈迦は修行して悟りを開いた。

■雰囲気と景色が重要

寺の立地環境は修行するための山が裏手にある。山の中腹というのが相場である。そのために閑静があり、木立の中にあるので涼しい。そして眺望もよいところが多い。

鹿沼市の観音寺は、閑静な田舎集落のはずれにある静かな寺である。当然のように山を背にしており、駐車場に車をとめて階段を登って境内にでる。

境内は小石が敷かれてとても小奇麗になっている。この境内から集落、そしてその向こうに見える緑の山並みが見える。この光景を見ていると何かそれだけで修行になるような気がする。この景色と静寂により心を落ち着けるのも修行であろう。

本堂に通され、お茶を一杯ご馳走になって住職と話をする。住職は気さくな人柄で、この景色の話と夏でも涼しいというこの寺の魅力を語ってくれた。この環境が住職の気さくで温和な人柄を形成しているような気がする。

茨城県桜川の特別霊場、雨引山楽法寺は眺望が良い。この寺は筑波山の北部に位置する雨引山の上にある。車で山道を登り、寺の下の駐車場にとめて更に階段を登る。この山は標高 409mなので、眺望が抜群である。筑波山が隣に見えて、関東平野が一望できる。

埼玉県吉見の安楽寺は小高い山にある。立派な山門があり、本堂、三重塔も県の指定文化財になっている。私にとっては寺の大きさが適度で歴史もあり、なぜかとても落ち着く寺である。御朱印もその場で高齢の住職が書いてくれた。

神奈川県伊勢原の特別霊場の大山寺も眺望抜群だ。ケーブルカーで登るのが一般的だが、残念

ながらケーブルカー改修中のため歩きになる。気候の良い9月ではあるが、汗びっしょり。最後の急な階段を登ると本堂にでる。

眺めは良い、伊勢原の街並みや湘南海岸も見える。そう、ここは標高512mである。

そして標高1252mの山頂には雨降神社上社がある。仏の上には神が居るという構図か。

■ミニ四国八十八

四国八十八カ所を回れない人のためというニーズなのか、模擬四国八十八カ所を用意してくれるところも多い。

古河市の永光寺はとにかく広い敷地がある。本堂や鐘楼以外に霊園、ボタンやシャクナゲがある広い境内がある。さらに幼稚園と保育園も併設している。

そして敷地の半分くらいは小高い丘が庭園のようになっている。そしてその庭園の中をめぐるように四国八十八カ所霊場を模した散歩コースがある。1番札所から順番に寺に見立てた碑が立っている。一回りするのには歩くだけならば5分もかからない。

同様に四国八十八カ所霊場を模した施設があるのは秩父の特別霊場の西光寺がある。ここは本堂を囲むように地下の通路があり、通路を一周すると四国八十八カ所の寺回りができる。

房総半島南端の南房総市の真野寺も同様に裏山に四国八十八カ所霊場巡りコースをあり、88番の後に高野山奥の院満願所がある。その満願所までまわると巡礼の証がもらえる。

三浦半島の妙音寺にも砂の石を敷き詰めた四国八十八カ所お砂踏み巡礼というのがある。踏み石に各寺の名前が彫ってあって、その石を踏んで八十八カ所の寺回りをする。この妙音寺はさらに裏山にも四国八十八カ所巡礼コースをつくっており、15分ほどで回れる。階段と坂道がそれなりにきついが上からの眺めが良い。

■寺との対話

寺の人とはそんなに話すことはないが、御朱印をもらうところで最低限の対話をする事ができる。それでも時にはお茶を頂いたり、お供物や御守りをもらったりもする。御苦勞様です、という言葉をもらうと改めて巡礼の旅をしていることに気付く。

御朱印は御朱印張を差し出して書いてもらうのが本来の姿である。しかし多くの寺はあらかじめ書いて朱印を押してある紙と交換する、いわゆる差し替えで済ませている。それはこの関東八十八カ所霊場巡りの御朱印張が一枚ずつ取りはずせるからである。

だからその場で書いて、名前や日付も入れてくれる寺には何かありがたみを感じてしまう。それが本来だとわかっていても、そう感じる人間の心理とは面白い。

ところが、稀ではあるが無人あるいは誰も対応しない寺もある。御朱印が書かれた差し替えの紙と300円を入れる箱を用意して、まるで自動販売機か道端の無人の野菜販売である。

さすがに初めての時はびっくりしたが、これもいくつか経験すると慣れてしまう。慣れとは本当に恐ろしい。

それにしても自動販売機を相手に空海を思って旅するとは、寂しい。

寺は9時から17時まで御朱印対応するように関東八十八カ所霊場の事務局から言われていて、留守にできない。問題はその間に何人くらい巡礼者が来るのか気になる。

一日当たり数人、多くても10人にはならない。どうしてわかるかと言うと直接住職に聞いたこともあるが、巡礼者の名前を記帳する寺があるのでその記録を見たのでわかる。

ちなみに本家の四国八十八カ所霊場の年間巡礼者数は約15万人という。一日当たり400人ということになり、二桁違う。

■境内で見かけるもの

多くの寺で真っ先に目に留まるのは六地藏である。今まで考えたこともなかったが、なんで六地藏なのかと素朴な疑問がわいてくる。

調べてみると、仏教では全ての生命は6種の世界に生まれ変わりを繰り返すという輪廻転生思想がある。6種の世界を六道と呼び、地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人道、天道のことで死んだら六道のどこかに生まれ変わることになる。そしてそれぞれを6種の地藏菩薩が救うとする説から生まれたものである。だから本来の六地藏は一体一体異なる。

起源は鎌倉時代ころで、天台宗が六観音を唱えたのに真言宗が対抗して六地藏を提唱したようだ。だから真言宗に六地藏が多い。ただ、現在は混ざっているようだ。

最近のトレンドかもしれないが、ボケ防止観音またはボケ封じ観音がある。観音像に子供のようなおじいさん、おばあさんがすがっている像である。この像は私にはなぜか痛々しさを感じる。

ボケつまり認知症は昔無かったか、極めて少ないはずである。昔は医学が発達していないのでボケる前に亡くなったしまうためである。

そして似たような悩みからか、ぴんコロ地藏がある寺も多い。ぴんぴん生きてコロリと亡くなりたいという願望から生まれたようである。

私自身も他人事でなくなった年齢になってきたので、ご利益を期待したい。おっといけない、ただお願いするのではない。自分でも努力しないといけない。

太子堂というのを多く見かける。言わずと知れた聖徳太子を祀ったもので、太子は仏教を保護し、普及させたので宗派を問わず太子信仰が根強いとされている。有名な十七条の憲法でも第二条で仏教を信じろとしている。もちろん第一条は和を大切にしなさいである。

国は聖徳太子の昔からずっと仏教を保護してきた。換言すれば活用してきた。仏教もそれによって日本全土に仏教を広めることができた。

神仏習合を進め、神道と仏教が融合して一つの信仰体系をつくっていく。神様仏様という言葉はこんなことから生まれたのだろう。

しかし明治維新の流れの中で、それまでの神仏習合から天皇の力、つまり神道を重視するようになる。明治元年には神仏分離令が出され、廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）運動に至る。

廃仏毀釈とは仏を廃し釈迦の教えを壊すという仏教排斥運動である。近代日本では最悪の宗教弾圧である。政治と宗教の関係は古今東西いつの世も利用し利用されて、実に複雑だ。

第三章 東関東周遊の旅

■東関東は面白い？

この関東八十八カ所霊場巡りのもう一つの目的である東関東の旅は、梅雨に入る 2015 年 6 月 6 日から 3 泊 4 日の自動車旅である。新緑も美しい、旅行には良い季節である。

もちろん巡礼しながらの観光ではあるが、この章では観光面のみを記載する。

都道府県魅力度ランキング最下位の茨城県を中心にしたこの地域を目的に旅行したことがない。正直に言って東関東に魅力を感じていなかったことが理由である。

私は海外旅行についてはリピータをしないというポリシーがある。夫婦で死ぬまでに世界 99 カ国を回るという目標のためである。

それに比べて国内旅行は何もルールも目標も決めていない。しかし国内どこに行っても人々の暮らしがあれば、歴史があり文化があるので見ること聞くこと体験することがたくさんあるはずである。

何となくメディアの影響や先入観で選んでいる自分に気が付く。たまにしか旅行しない人は別として旅のチカラ研究所としては、この地域も研究すべきである。

だからこの巡礼の旅をすることで回らないといけないという状況を自分で作った。いや、これは空海の導きかもしれない。

■町おこし

益子焼で有名な益子町は町おこしで昔と大きく変わったと妻が言う。妻はその昔この辺には良く遊びに来ていたらしく、その変わりように驚いている。

無電柱化して電線、電信柱が無くなりとてもすっきりしている。街並みは落ち着いた雰囲気です。古い益子焼の店と新しいおしゃれなカフェやレストランが同居している。

街の中心部に広場のようなところがあり、店も何軒か集まっている。そこには大きな狸の置物があり、その狸に誘われるように観光客が入っていく。その中には外国人観光客も多い。それもアジア系ではなく欧米系の外国人が多いのだから驚く。



益子焼の店と一言でいっても高級品を置いている店と、骨董屋のような店が混ざっていて、更

にテントを張った骨董市も混在している。

私は陶器の知識を持ち合わせていないので分からないが、本質は益子焼の魅力だろうと思う。それでないと町おこしは本物にならない。

益子焼が高く評価される理由は土にあるという。珪酸分が多く鉄分を含んでいるので、可塑性に優れ耐火性に富む。そのため粘土に他の成分を加えないので厚手になり独特の魅力が生まれるという。

その益子焼が芸術性の高い陶器に変わったのは、ある人間国宝が移り住んでからだという。そして現在は 400 以上の窯があり、移り住んできた陶芸家もたくさんいるという。伝統と新しさを模索する中で変化し続けているという。

益子の近くに結城紬で有名な結城がある。こちらにも足を伸ばすと、ここでまた驚いてしまう。昔のままの街並みが残っている。昔と言っても中途半端な昔で 40 年か 50 年前の状態なので、典型的な地方都市の状況である。シャッターが閉まったままの街並み、いわゆるシャッター通りである。妻も何となくがっかりとしている。

結城も益子もどちらも伝統工芸をバックにした街であるが、この違いは一体何だろうかと考えてしまう。町おこしの実施、あるいはそのやり方の問題なのか。

地方都市の興亡を考えるには、この二つの街の違いを検証することをお勧めしたい。

■奥久慈

茨城県北部で栃木県と県境を接するところに大子町がある。この地方を奥久慈地方と呼んでいる。茨城の秘境と言ったところである。

宿は伊東園グループのホテル奥久慈館に泊まる。一泊二食付きで 7800 円、平日も休日も同一料金で泊まれる。そして夕食は生ビール、焼酎、ワイン、日本酒が飲み放題だから、酒飲みには大変ありがたい。

伊東園ホテルグループは経営危機に陥ったホテルや旅館を安く買い取り、独自のノウハウで再生させるというビジネスモデルである。既に関東を中心に 40 以上の施設があり、ほぼ同じ価格とサービスで営業をしている。

同様なビジネスを展開しているのに、おおるりホテルグループや最近参入した大江戸温泉物語グループがある。

私もその安さからよくこれらの施設を利用するが、ここ奥久慈館は初めての利用になる。

それらの施設に宿泊すると私たち夫婦は泊まり客の人間模様を観察することが多い。あの少人数の団体はどんな間柄なのか、あの夫婦は一言も口をきいていないとか、飽きない。

ここに泊まった理由は袋田の滝が目的である。車で比較的近くまでいけるのでアクセスは悪くない。たくさんの土産物屋が並んでいるが半分くらいは閉まっている。昔はここも一大観光地として隆盛を誇ったに違いないということはひしひしと伝わってくる。歩いてその土産物屋群を通り、トンネルを抜けると大きな滝がある。

高さ 120m・幅 73m で相当迫力がある。日本三名瀑の一つという。岩壁を四段に流れることから、四度の滝とも呼ばれている。

その迫力に私たち夫婦は驚いてしまう。あまり期待していなかったのがかえって評価が高くなる。人間とは勝手なもので期待以上だと高評価になる。そして想像を超えた場合は感動になる。

この滝に何故こんな迫力を感じるかというと、すぐ目の前で滝が見られるからだと思う。展望台が滝の近くにまで出ているからだろう。

他の滝ではこんなに近くで滝を見ることができない。例えば日本三名瀑の残りの二つは那智の滝、日光華厳の滝であるが、どちらも遥か遠くから滝を見ることしかできない。

この滝は厳冬期には凍結するという。その写真も展望台近くに飾ってあったが、是非凍った本物を見たいと思った。



■水戸徳川家の街

水戸市内にはいたるところに像がある。一番有名で多いのは水戸黄門の像で8体もあるという。水戸出身の最後の将軍徳川慶喜や幕末の第9代水戸藩主徳川斉昭なども多い。

そして水戸と言えば偕楽園で、これも日本三名園の一つである。この偕楽園は徳川斉昭が造ったものである。偕楽園は広くて、高台になっているので景色も良い。ついでにあと二つの名園とは岡山の後楽園、金沢の兼六園である。

かつて藩校であった弘道館、それから水戸城跡など、今でも江戸時代を感じさせてくれる歴史がこの街には残っている。

水戸徳川家は徳川御三家の中でも文武両道を貫いた藩で、何か一本筋が通っている気がする。それは徳川家にありながら強い尊王思想にある。なぜ御三家にして水戸徳川家が尊王なのか、とても興味深い。だから水戸を探索する意義がある。

水戸は申し訳ない言い方であるが田舎の都市である。変に発達しなかったからここに江戸が残っているという気がする。少なくとも東京よりも江戸色が濃く残っていると思う。

まさしくここは水戸徳川家の街である。

宿泊は水戸市内のビジネスホテルの水戸第一ホテル本館に泊まる。宿泊費は朝食付きツインルームを二人で5000円と安い。設備はさすがに古いが、価格からして我慢できるレベルである。

部屋の風呂以外に男性用は5人くらい同時に入れる大浴場がある。女性用は一人用だがちょっと豪華な西洋風バスタブがポツンと置いてある。実際に入浴した妻に聞くと快適という。

さすがに朝食はパンとコーヒーというシンプルなものであるが、必要にして十分な気がする。旅の目的からすれば都市部の宿泊はこんな宿で良いかと思う。温泉に保養に来ているのではなく、

東国お遍路で今回は水戸市内を散策するための宿泊だから、むしろ夕食を食べに市内にくり出せるので好都合である。

地方都市では東横インやスーパーホテルなどの大手ホテルチェーン以外に独立系の安い宿は結構多い。交通の発達で日帰りビジネスが増えて地方都市のビジネスホテルは逆境だからである。そのため価格対応をするので、旅行者にはありがたい。

■原風景

関東平野のほとんどの場所から標高 877m の筑波山を見ることができる。それは周りに何もなからだ。茨城南部を中心にした関東平野の原風景は筑波山である。筑波山をどの方位に見るかで自分が今どこにいるかが分かる。

筑波山はロープウェイの駐車場から歩いて一時間程で登れる。時間があれば歩きたかったが、今回の旅の目的ではないので私たちはロープウェイで登る。関東平野をほぼ一望でき、スカイツリー、富士山、霞ヶ浦も見える。

確かに眺めは良い、でもそれだけかもしれない。それ以上のことを感じない。ロープウェイで簡単に登ったからかもしれないが、筑波山はやはり登る山ではない。方位確認用の山と言ったら失礼かもしれないが茨城の原風景として見る山なのである。



真っ直ぐな道路というのを北海道ではよく見かける。茨城では真っ直ぐな道路はあまり見かけないが、真っ直ぐな線路を見ることが多い。関東平野は広大な平野だが、家や工場が立ち並んでいる。ところがここ茨城では幸いにして？これらが無いので広い原っぱが残っている。そこに線路が一本走っている。踏切を渡ろうとすると右も左も一本の線路が真っ直ぐに続く原風景がある。



■初めての犬吠崎

霞ヶ浦から犬吠崎を目指すが、行くまでの道は太平洋と利根川の間を長い時間走る。そして利根川が海にそそぐ直前の大きな橋が銚子大橋で、全長 1.2km もある。この橋を渡ると銚子市街地に入る。

犬吠崎はこの銚子市街からさらにはずれにある。歌の下手な人、音痴の人を犬吠崎の灯台と言うことがあるが、まさしく調子（銚子）はずれなのである。

犬吠崎の近くに特別霊場の万願寺がある。この寺はとても大きく、観光バスが何台も乗り付けている。万願寺から 1km ほど行くと犬吠崎の灯台に出る。

灯台の入口には珍しい白い丸ポストが設置されている。灯台を管理する銚子海上保安部と銚子郵便局が協力して、白い犬吠崎灯台にちなんで観光のイメージアップのために作ったという。



宿泊は岬からほど近い、ぎょうけい館という宿をネットで予約していた。宿のサイズは大きからず、小さからずちょうど良い。

ネットでは分からなかったが、意外にこの宿は当たりかも知れない。それはまず従業員の若さにある。私は旅館、ホテルの評価に従業員の年齢を参考にしている。夏休みの学生アルバイトは別にして、従業員に若者がいるかというのがポイントである。それは経営者の方針とその旅館の魅力や将来性が分かるからである。

旅館に先行きがないならば当然若者は採用しないし、若者も就職しない。若者がいるということは、そうではないことを裏付けている。この宿は若者が接客していて、そしてその教育もしっかりしていると感じられる。

かわら版なるものが各部屋に配られる。日の入、日の出の時間、食事の時間、館内の案内、さまざまな情報が詰まっている。船旅では船内新聞が毎日船室に配られるが、それに似ている。

食事も終わりのんびりと過ごす。夜の海と灯台の明かりを見ながら部屋で飲み始める。せっかく犬吠崎の灯台が近くなので、灯台の明かりを感じるためにカーテンを全開にして部屋の電気を

全て消してソファにゆったりと座り、ワイン片手に外を見つめる。

窓の向こうに暗い海があり、海には白いなみが押し寄せている。波の向こうの岸壁の上に灯台がある。灯台の明かりは一定の周期で光っている。その周期は 15 秒で、心地よい周期になっていることに気が付く。

光っている時に何かを想うと消えて、そしてしばらくするとまた光る。まるで催眠術師が呪文を唱えるかの如く、何か心地よい。アルコールも手伝って太平洋の夜の海と、灯台の光の 15 秒のハーモニーが何か伝えているようだ。

空海が見ていた空と海だけの世界ではないが、夜の海と灯台の光は私に悟りを開かせてくれるような気持ちにしてくれる。灯台の光と海だけの世界ならば、灯台宗の光海と名乗ろうか。

しかし、そんなことはないだろう。単なる酔っ払いが悟るなどあってはならない。

それにしても私の人生において灯台の光をつまみにして飲むのは初めての体験になる。

第四章 振り返り、そして

■お勧めの寺

88 霊場と 7 特別霊場で合わせて 95 の寺を回った中で、お勧めの寺はどこだろうという質問をよく受ける。

優等生的な回答をすると、全部を回って意味があるということになる。確かに何の特徴もない平凡な寺が多い、誰もいない寺もある。それらを含めて一体なのだと思う。平凡があるから非凡が分かるのかもしれない。

全部回るということは様々なことに遭遇する。何か気づきをもらえるかもしれない。あるいは私たちが東関東の旅をするようになったように、行ったことのないところにも行ける。食わず嫌いを無くせるかも知れない。

しかしながらいくつかを選ぶとすると、この旅行記で取り上げた寺を勧めるのは説明するまでもない。

そして空海を訪ねるという意味で一つを選べば、神奈川の雨降山大山寺を私は勧める。他の寺は空海との直接的な関係がないが、この寺は空海が住職をしていたと言われている。

奈良の東大寺を開いた良弁が 755 年に開いた寺で、三代目の住職が空海ということで他の寺とは全く起源が異なる。後世になって弘法大師を祀る寺は多くあるが、住職をしたという寺は少ない。

江戸時代までは現在のカーブルカーの終点の雨降神社下社の場所にあったが、明治の廃仏毀釈で暴徒に破壊されて現在の場所に移ったという。日本の仏教の歴史の一端を知ることができる。

そしてこの寺は珍しく檀家を持たない。賽銭、線香、御朱印記帳などが収入とのことで、本来の寺の姿のような気がする。

檀家制度は、江戸幕府がキリスト教を禁止し排除するためにキリシタンでないことを証明する寺請証文を書かせ、国民はどこかの寺の檀家になること義務づけたのが始まりである。これによ

って寺には檀家が増え、収入も安定し拡大することになった。

大山寺には日本の仏教の歴史が詰まっている。

御朱印も差し替えではなく、私たちが行った時は女性僧侶がその場で書いてくれた。

■ 仏教を思う

昔、学校で世界の三大宗教はキリスト教、イスラム教、仏教と教えられた。だが信者の数では仏教は3番目ではなくヒンズー教が3番目である。また実際に世界を旅行していると勢力的にも仏教は3番目に入るとは感じられない。むしろ仏教はあまり知られていない。

何よりも神の存在についてキリスト教、イスラム教とは全く異なる。キリスト教もイスラム教も創造主である神がいて、キリストやムハンマドは預言者と呼ばれている。預言者とは予言者ではなく、預言つまり神の言葉を預かった者である。そしてこの二つの宗教は創造主の神は同じなのである。ついでに言えばユダヤ教も同じ神である。

つまり絶対的な神がいて、人間に伝える預言者が異なるので違う宗教になった。

全ては神の意志で動いているので神の意志には逆らえない。だから神の意志と思って果てしない戦争や自爆テロが続く。彼らは何も悪いと思っていない。創造主である神の意志だから。

仏教はというと、人間である釈迦が修行して悟りを開いたものである。現在は釈迦または仏陀と呼ばれるが正確には釈迦族の王子のゴータマである。そのゴータマが悟った結果、こう考えれば煩惱がなくなるとか、心が救われるということが教えになっていったと私は理解している。

つまり言い方を替えると、仏教は宗教ではなく哲学のようなものと考えられる。悟りを得るために釈迦の教えを聞き、実践するというものになっている。

少なくとも原始仏教はそうになっていた。これがだんだん変化していく。経を唱えると救済されるとか、経の中身ではなく題目だけ唱えれば救われるとか、最後はお布施で救済されるというように変化していった。原始仏教から小乗仏教、大乘仏教、現代の仏教へという変化である。組織として巨大化し、商業化されたものと私は思う。

教えを広めるためには組織化し持続させないといけないから、それもしょうがないだろう。ただ本質は忘れてはいけない。

今回の旅をして仏教についていろいろ思い、感じた。

寺は修行の場である。そして修行から悟りを得ることが原点である。そして自分は悟るまでは程遠い場合には、悟りを開いた先人（仏）にお願いをするのではなく自分が目標に向かって努力することをその先人（仏）の前で誓うということかもしれない。

キリスト教のように万物を創造した絶対的な神に祈るのではなく、仏教は自分で修行や努力して解決するというように理解できる。いや、そう理解したい。

菩薩や如来はその案内人、アドバイザーかもしれない。菩薩も如来も現存しないのでその代りに僧侶がいるのだろう。

そして彼ら先人たちの悟りへの道標、あるいは悟りまでの旅については旅行記というものが、経という形で残っていると思う。ところが日本では、経はありがたいことを言っているのだろう

が意味不明という代名詞にもなっているから本当にもったいない。

私は常々、日本の仏教界にお願いしたいことがあった。それは経を現代日本文に訳してもらうことである。キリスト教の聖書はもちろん、敬けんな仏教国のタイも教えを分かりやすく民衆に伝えている。そうでないと先人の悟りの旅は、正しく広く後世に繋がらない。

■目的は達成したか

3年半にわたるこの旅の目的は二つであった。

一つは親や叔父の供養である。95の寺をお参りする時に手を合わせながら亡くなった親のことを想うようにしていたので、私たちの一人よがりかも知れないが供養になったと勝手に思っている。何しろ相手に確認できないから仕方ない。

もう一つの茨城を中心とした東関東の旅はどうだったかという、どうしてなかなか面白い。あまり大きな期待をしていなかったのもそう感じるのかも知れないが、何も無いという原風景が目に残るようになったような気がする。そして水戸徳川家の姿もしかりである。

少なくとも茨城県の魅力度ランキング最下位には異議を唱えたい。

そして空海を思っただけの旅、同行二人は正直言ってできていない。

3年半という長い間に秩父往還歩き旅、イタリア旅行、地球一周の船旅などを経験したこともあり、宗教とは何か、仏教とは何かということを考えることはあっても空海を思うことはあまりなかった。むしろ釈迦を思っただけの旅になった感がある。

ひょっとしたらこの関東八十八カ所霊場巡りでは、空海を思う旅は難しいのかもしれない。それはこの巡礼の歴史であり、巡礼者の数や思いであり、寺側の対応などが影響している気がする。

まあ、自分以外に原因を求めることはやめておこう。次の機会をつくれればよい。

■次はどこへ

次はどこに行こうか。いくつかの寺で聞いた話では、やはり本場の四国八十八カ所霊場、関西圏の西国三十三カ所霊場も良いという。そんな中、ある寺の住職が強く推してくれたのが小豆島八十八カ所霊場である。

小豆島は空海の出身の讃岐と京都との間に位置しているので、しばしば立ち寄り修業や祈念を行なったという島である。空海との同行二人旅をするには良いかもしれない。

その住職が勧める理由は、小豆島の巡礼コースは大変景色が良いという。寺は海岸近くの岩屋や山の上であって、瀬戸内海の眺望が抜群であるという。瀬戸内海を感じることができるという。

それから小豆島は四国や関東に比べて小さいので巡礼コースは約 140km と一週間程度で歩ける。ちなみに四国はその 10 倍くらいあり、全て歩いた場合には 50 日以上かかる。

行くならばアル中（歩き中毒）を自認する私としては是非とも歩いてまわりたい。

そして真言宗のみではなく、他の宗派あるいは宗派を越えて、そして神道や他宗教でも同様な巡礼旅も結構多い。